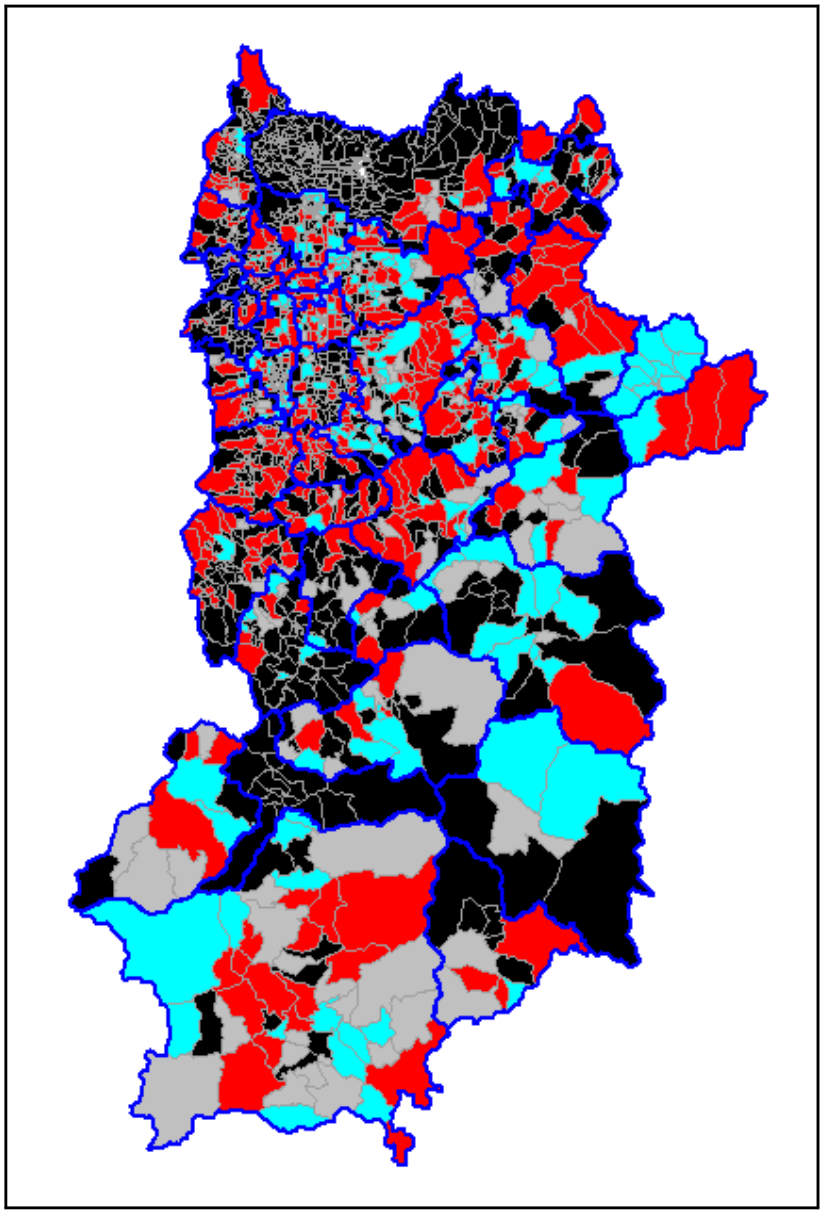
農業・林業集落アンケート調査によるアライグマの生息状況・被害状況（平成２３年度）

１．平成23年度の農業集落アンケート調査によるアライグマの分布



凡例　図中　青線　旧市町村界
市町村界内側の線　大字・地区界
市町村界、大字・地区界の凡例は以降の図も同様である

右図は、平成23年度の農林業集落アンケート調査による、アライグマの分布である。

農業集落でアライグマが「いる」と回答があった場合に「分布している」とした。回収無しには既に人が住んでいない集落も含まれている。

県内の広い範囲から「いる」との回答があり、県北部から県中部を中心に、既に県内の広い範囲で生息していることがわかる。

平成23年度
- いる　406集落
- いない　214集落
- 回答無し　115集落
- 回収無し　1073集落
- 全　1808集落

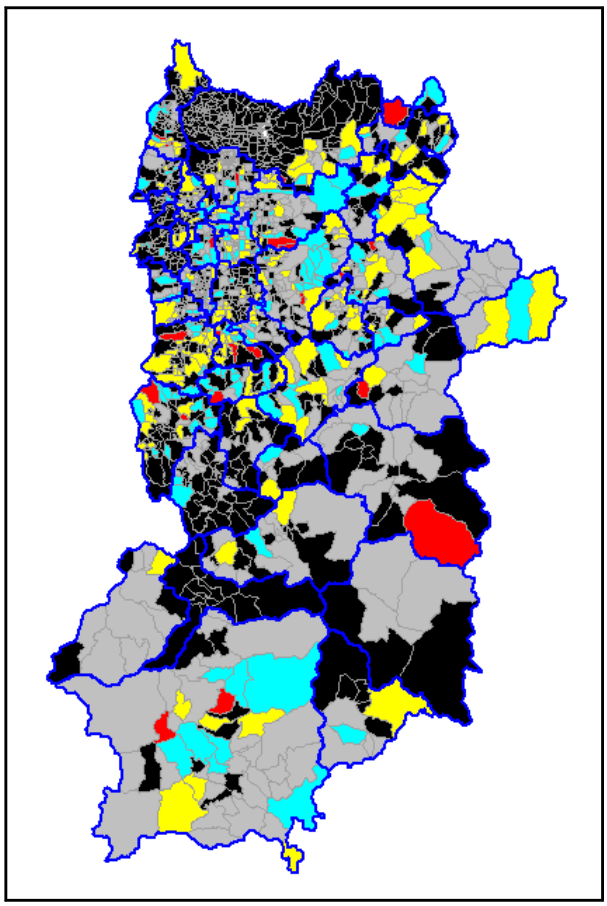
参考）平成22年度
- いる　416集落
- いない　209集落
- 回答無し　123集落
- 回収無し　1060集落
- 全　1808集落

参考）平成21年度
- いる　417集落
- いない　367集落
- 無回答　3集落
- 回収無　1021集落
- 全　1808集落

参考）平成20年度
- いる　322集落
- いない　318集落
- 回答無し　117集落
- 回収無し　1051集落
- 全　1808集落

参考）平成19年度
- いる　355集落
- いない　596集落
- 回答無し　100集落
- 回収無し　757集落
- 全　1808集落

2. アライグマの農地・集落周辺への出没状況（平成23年度）



右図は平成23度の農業集落アンケートによる、アライグマの農地・集落周辺への出没状況である。

アライグマが「いる」と回答があり、かつ本設問の回答があった367集落の内訳は下記の通りである。

「よく見る」、「たまにみる」との回答は県中部から県北部にかけての地域からが多い傾向にある。

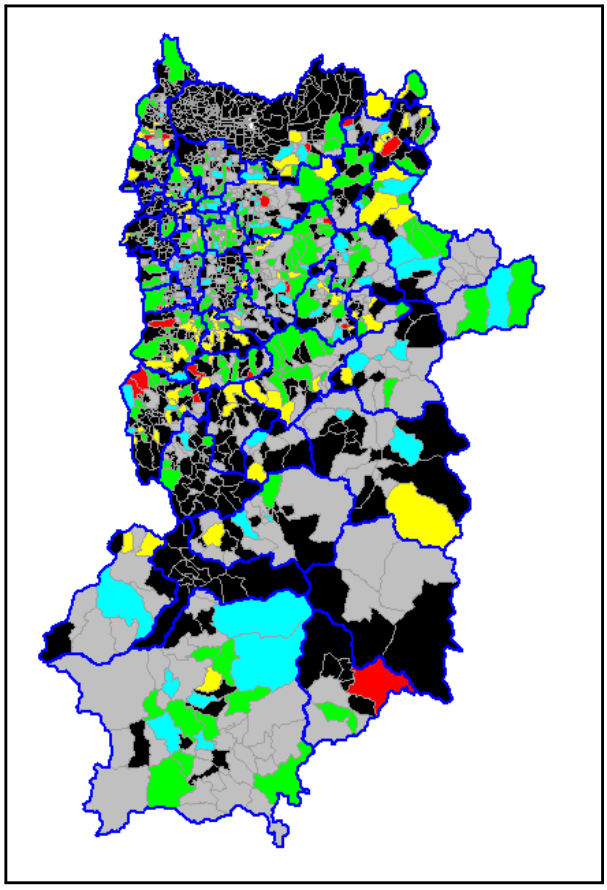
平成23年度

よく見る	22集落	(6.0%)
たまに見る	185集落	(50.4%)
あまり見ない	160集落	(43.6%)
計	367集落	

参考）平成22年度

よく見る	30集落	(8.0%)
たまに見る	188集落	(50.1%)
あまり見ない	157集落	(41.9%)
計	375集落	

2. アライグマによる農業被害の大きさ（平成23年度）



右図は平成23度の農業集落アンケートによる、農業被害の大きさの意識調査の結果である。

アライグマの被害は、県北部から県中部を中心に発生している。

被害の大きさは、「軽微」という回答が約53%と最も多かった。しかし、「大きい」または「深刻」という回答も併せて約27%存在しいている。そしてこれらの地域は、農地・集落周辺への出没が多い地域と重なっている。

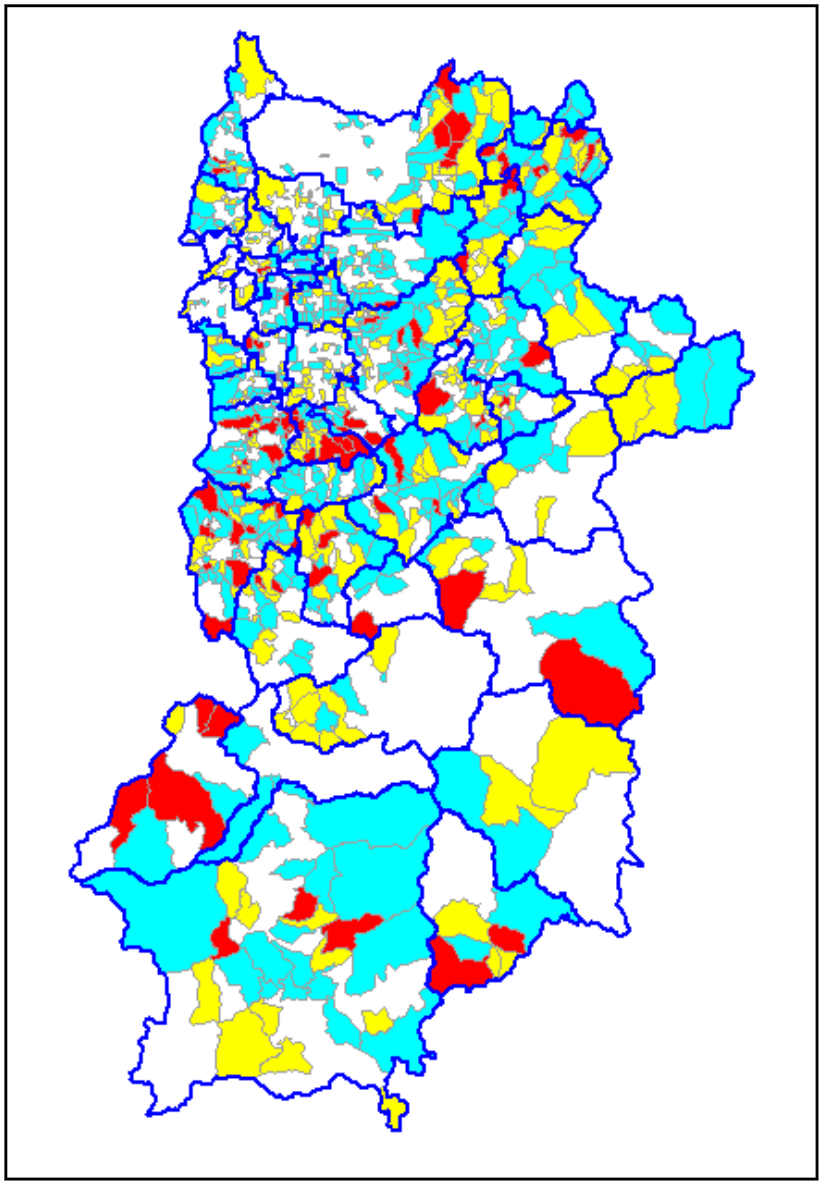
・平成23年度

ほとんど無い	85集落	(20.8%)
軽微	215集落	(52.6%)
大きい（生産量の30%未満）	88集落	(21.5%)
深刻（生産量の30%以上）	21集落	(5.1%)
計	409集落	

・参考）平成22年度

ほとんど無い	64集落	(15.7%)
軽微	251集落	(61.7%)
大きい（生産量の30%未満）	72集落	(17.7%)
深刻（生産量の30%以上）	20集落	(4.9%)
計	407集落	

３．アライグマの農地・集落周辺への出没動向（平成19～23年度の５年間）



右図はアライグマの農地・集落周辺への出没の5年間の動向である。

毎年集落毎に農地・集落周辺へのアライグマの出没を1．よく見る、2．たまに見る、3．あまり見ないの区分で回答を得ているが、これらの回答を「よく見る」は＋1、「たまに見る」は±0、「あまり見ない」は－1とポイント化し、それを集落毎に合計し、＋1以上の場合（つまりよく見るが多い場合）は赤色で、0になる場合（つまりたまに見るになる場合）は黄色で、－1以下の場合（つまりあまり見ないが多い場合）は青色で各集落に色をつけた。5年間で1度でも回答があった場合を集計している。なお、空白は調査した5年間、アライグマがいない、無回答、集落に人が住んでいないのいずれかである。

アライグマの農地・集落周辺への出没は、県北東部から県中部、県西部、そして県南部の一部地域でにかけて多くなっていた。これらの地域は、被害が「大きい」または「深刻」と回答のあった地域と概ね重なる傾向にある。

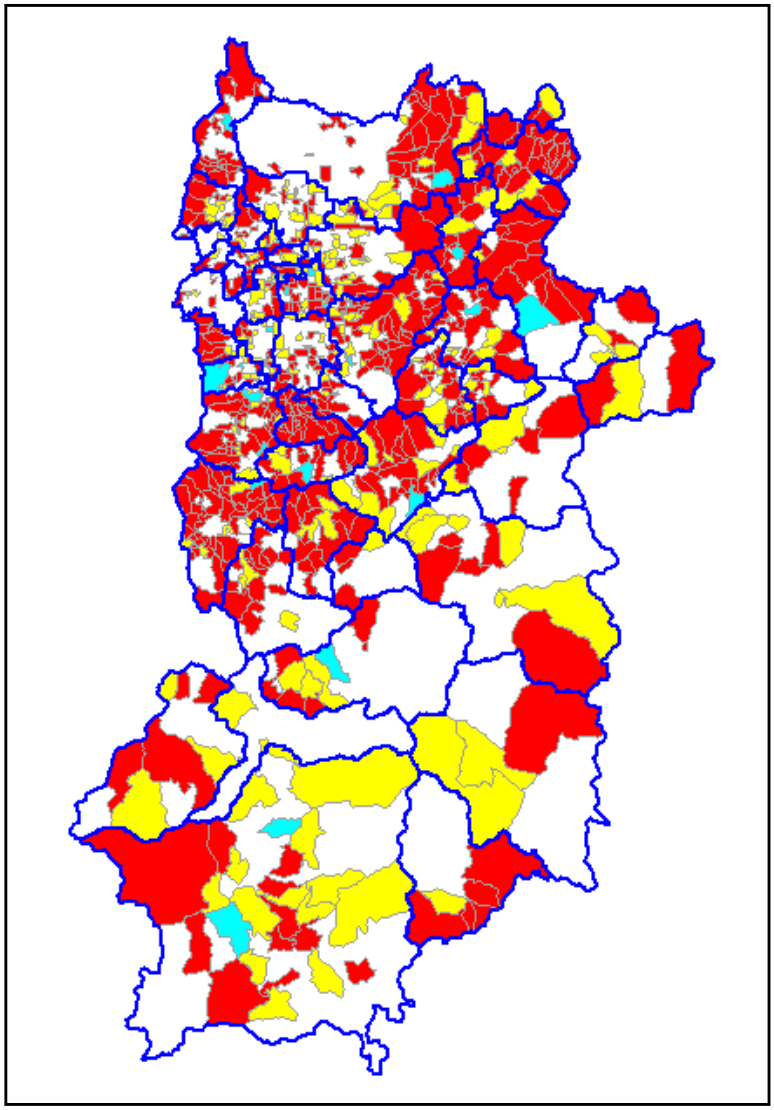
・平成23年度までの5年間

よく見る	86集落（11.0%）
たまに見る	271集落（34.7%）
あまり見ない	424集落（54.3%）
回答数	781集落

・参考）平成22年度までの4年間

よく見る	80集落（11.3%）
たまに見る	279集落（39.4%）
あまり見ない	349集落（49.3%）
回答数	708集落

4. アライグマの農業被害意識の動向（平成19～23年度の5年間）



右図はアライグマによる農業被害の意識の5年間の動向である。

毎年集落毎に農業被害を前年度（初年度調査時のみ10年前と比較して）より1．増えた、2．変わらない、3．減ったの区分で回答を得ているが、「増えた」を＋1、「変わらない」を±0、「減った」を－1とポイント化し、それを集落毎に合計し、＋1以上の場合（つまり増えている場合）は赤色で、0の場合（つまり変わらない場合）は黄色で、－1以下の場合（つまり減っている場合）は青色で各集落に色をつけた。5年間で1度でも回答があった場合を集計している。空白は調査した5年間、アライグマがいない、回答がない、集落に人が住んでいないのいずれかである。

アライグマによる農業被害の意識は、ごく一部では減っているものの、回答を得た集落のうち70％近くが増えたとなっおり、農業被害は県全体で増加傾向にあることが判る。

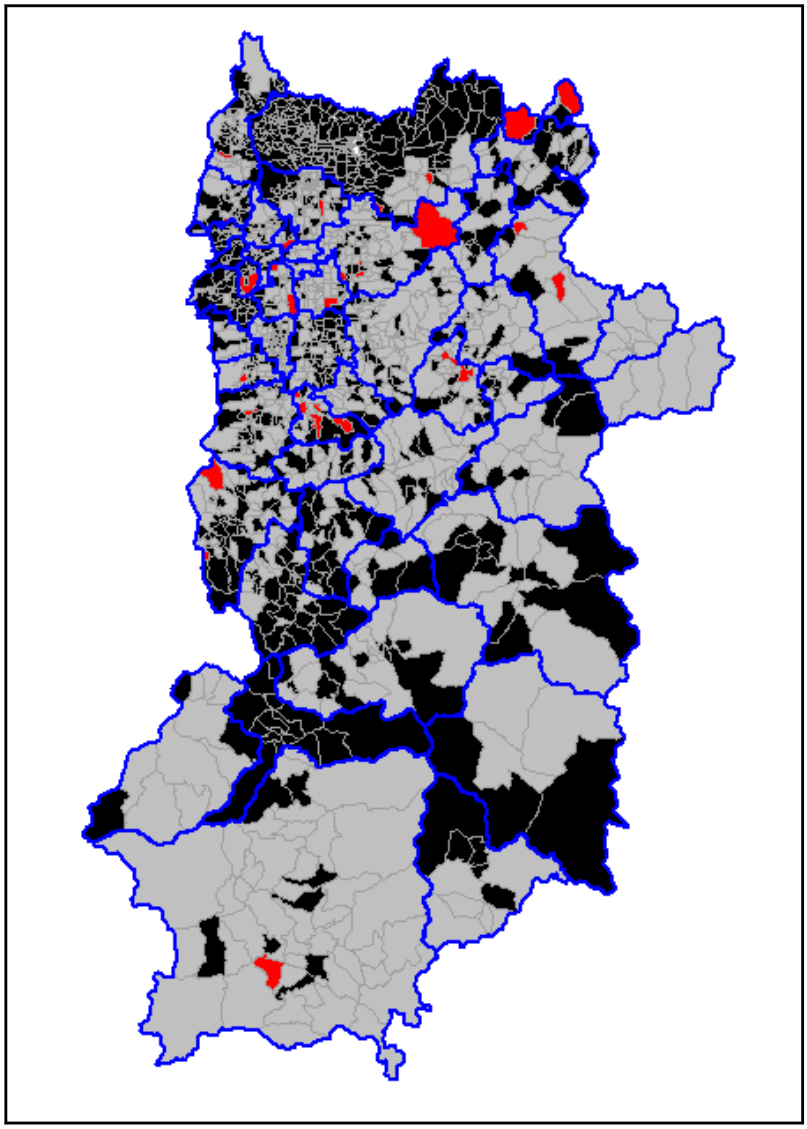
・平成23年度までの5年間

増えた	531集落	(68.8%)
変わらない	218集落	(28.2%)
減った	23集落	(3.0%)
回答数	772集落	

・平成22年度までの4年間

増えた	488集落	(69.6%)
変わらない	196集落	(28.0%)
減った	17集落	(2.4%)
回答数	701集落	

5. アライグマによる衛生被害



右図は平成23度の農業集落アンケートによる、アライグマによる衛生被害の意識調査の結果である。

「家屋に住み着く、糞尿被害がある」を衛生被害とした。

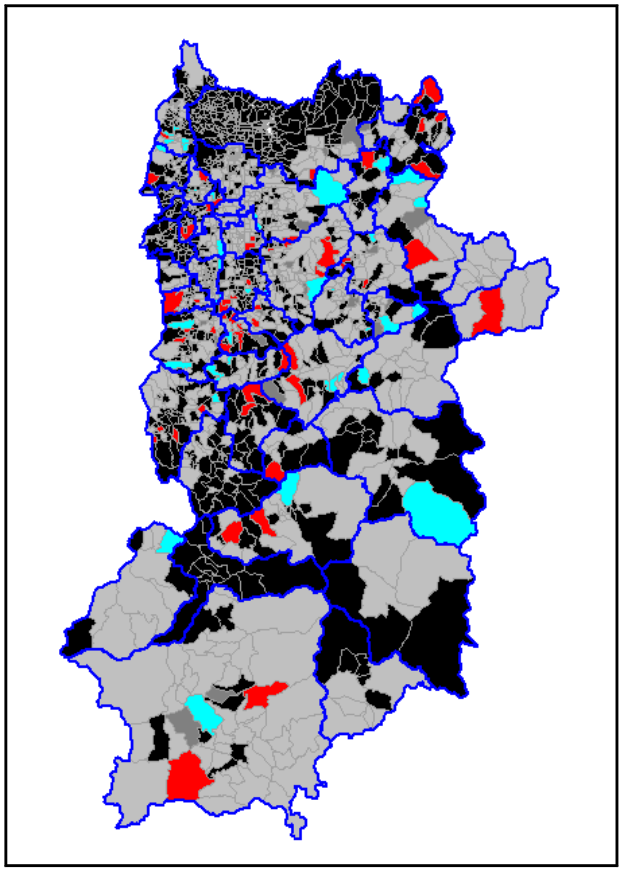
回答数は多くないが、県中部から県北部を中心に回答がある。

平成23年度
■衛生被害がある　34集落

・参考）平成22年度
■衛生被害がある　38集落

・参考）平成21年度
■衛生被害がある　32集落

4. アライグマの被害対策　侵入防止柵（防護柵）の設置の効果（農地・平成23年度）



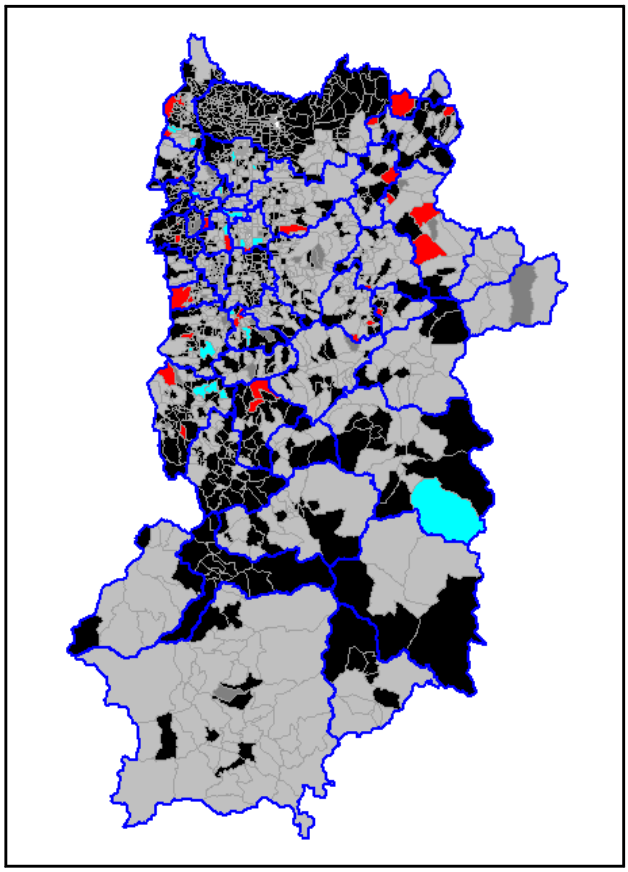
右図は平成23年度の農業集落アンケートによる、農業被害対策の、アライグマ侵入防止柵（防護柵）の設置の効果の意識調査の結果である。

効果の有無の回答のうち約60%が、侵入防止柵（防護柵）による被害対策は効果があったということであった。

平成23年度
- 効果があった　61集落（59.8%）
- 効果がなかった　41集落（40.2%）
- 回答　102集落

参考）平成22年度
- 効果があった　69集落（65.1%）
- 効果がなかった　37集落（34.9%）
- 回答　106集落

5. アライグマの被害対策　有害捕獲の効果（農地・平成23年度）



右図は平成22度の農業集落アンケートによる、農業被害対策の、有害捕獲を実施した効果の意識調査の結果である。

効果の有無の回答のうち60%が、有害捕獲による被害対策は効果があったということであった。

・平成23年度
- 効果があった　30集落（60.0%）
- 効果がなかった　20集落（40.0%）
- 回答数　48集落

参考）平成22年度
- 効果があった　23集落（47.9%）
- 効果がなかった　25集落（52.1%）
- 回答数　48集落

アライグマの生息数が少ない侵入初期には、被害も少ないため対応が後手になりがちである。そして、被害が顕在化してから捕獲を実施することが多いが、その時点で既にアライグマは個体数を増加させている。アライグマの産仔数は年に約3～7頭と多産なため、例えば10頭生息しているとすると9頭までを捕獲しなければ個体数を低減させることはできない。アライグマはそもそも北米の動物であり、日本の自然界に存在するものではないため、「外来生物法」で、「特定外来生物」に指定されている。外来生物法の「防除計画による捕獲」、鳥獣法の「有害捕獲」によって、積極的に捕獲を実施し、アライグマを地域から排除しなければならない。